

# 「水辺保全と村落開発」ワークショップ

## 報告書

平成13年5月

国際協力事業団  
森林自然環境協力部

## 序文

森林・自然環境協力部では、平成13年5月9日に「水辺保全と村落開発」ワークショップを開催致しましたところ、関心のある多くの皆様方にご参加頂きました。

当部では従来、主に政府の中堅技術者を対象として漁業・養殖等の技術移転を行う水産分野の協力を進めてまいりましたが、今後は漁民の能力向上および漁民による資源管理の推進を通じた総合的な村落開発に取り組むことが必要と考えています。

この新しい協力課題への取り組み方を検討するためにワークショップを企画しました。このワークショップに対して多くの方の参加申し込みがあり、本テーマへの関心、期待の高さを痛感しました。ワークショップは、参加者が「水産」、「環境」、「村落」の3つのグループに分かれて「漁民の生活レベルの向上」を課題としてそれぞれのグループの視点から課題解決の方法を分析・議論しました。

この報告書は、ワークショップの内容を取りまとめたものです。今後、「水辺保全と村落開発」に係る事業を実施する上で、貴重な参考資料になると考えています。また、参加いただいた皆様を始めとして関連する多くの分野の方々の協力を得ながら事業を実施が重要することが考えています。このワークショップが、関係者のネットワーク構築にも貢献できれば幸いです。

最後にご多忙の中参加いただき、本ワークショップを充実したものとしていただいた全ての皆様に改めて厚くお礼申し上げます。

平成13年5月

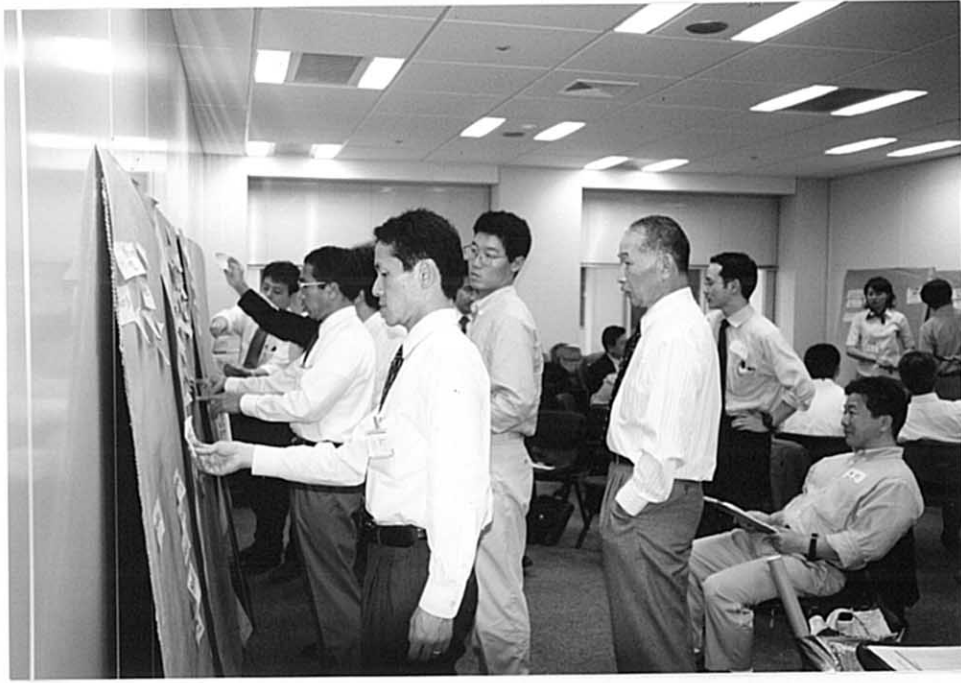
森林・自然環境協力部  
部長 宮川 秀樹



▲「水産」「環境」「村落」の3グループに分かれて問題分析が行われた



▲積極的に意見を出す参加者



▲分析作業は参加者全員で行われた



▲各グループがそれぞれの分析結果を発表し意見交換を行った

# 目 次

## 序 文 写 真 目 次

### 本 編

<b>1. ワークショップ総括</b> .....	<b>1</b>
(1) ワークショップ概要 .....	1
1) ワークショップ背景 .....	1
2) ワークショップ目的 .....	2
3) ワークショップ手法 .....	2
4) ワークショップスケジュール .....	2
5) 参加者リスト .....	4
(2) 終了時アンケート結果 .....	5
<b>2. ワークショップ分析結果</b> .....	<b>10</b>
(1) 参加者分析結果 .....	10
(2) 問題分析結果 .....	10
1) 水産グループ .....	11
2) 環境グループ .....	12
3) 村落グループ .....	13
(3) 議論内容 .....	14
<b>3. 成果と今後の課題</b> .....	<b>16</b>

### 資 料 編

- 別添資料 1：ワークショップ説明文書
- 別添資料 2：参加者分析結果
- 別添資料 3：問題分析結果（水産グループ）
- 別添資料 4：問題分析結果（環境グループ）
- 別添資料 5：問題分析結果（村落グループ）
- 別添資料 6：問題分析結果（水産課内）

<本 編>

# 1. ワークショップ総括

## (1) ワークショップ概要

### 1) ワークショップ背景

JICA は、水産「技術」を中心とした技術協力を行ってきたが、多くの国で漁民は最貧困層に位置し、今日 ODA の最大課題となっている貧困削減の対象でもあることから、漁民のエンパワーメントあるいは漁民による水産（資源/業）管理を主眼に置いた総合的な村落開発といった案件に積極的に取り組む必要性が高まっている。

農業では農村開発、林業では社会林業と「住民」を中心とした協力が行われているが、水産業では海や水産資源は誰のものでもないことから利害関係や責任の所在が特定しづらいこと、水産資源の把握が難しいこと、環境保全とのつながりが強いこと等の要因から、農業、林業分野とは異なる側面から考え方（持続的な資源利用を考慮した村落開発）の整理をしていく必要があると思われる。（表1参照）

表1：農林業と漁業の資源の特徴

	農林業	漁業
所有	多くの場合、誰のものか明らか	誰のものでもない
範囲（境界）	明らか	あいまい（多くは不明）
資源の状態	目に見える	見えない
生活の場との距離	多くの場合、近い	多くは遠い
工業排水の影響 （排水汚染等）	比較的少ない	直接的に影響を受ける

平成12年度より当部水産環境協力課が中心となり、「水辺保全と村落開発」研究会を発足させ、政府と漁民が共同して資源管理の責任を果たす Co-management(CM)、ボトムアップ型の資源管理である Community Based Fisheries Management(CBFM)に関する調査研究や、現場で活躍している普及員による日本における漁村開発についての講義の開催等を行ってきた。今回、JICA内部だけでなく、関心のある多くの方々が参加し議論することで、本テーマについてより理解を深め、さらに関係者のネットワークを構築することを目的とし、本ワークショップを開催した。

(ワークショップ説明資料：別添資料1参照)

## 2) ワークショップ目的

漁民がおかれている状況を環境、水産、村落開発の視点から分析し、問題を明確化する。

本分野に関わる多くの関係者、(コンサルタント、NGO、大学関係者、関係省庁、JICA関係者)との意見交換、情報共有を行い、国内ネットワークの構築を行う。

「水辺保全と村落開発」研究会の今後の方向性について見通しをつける。

## 3) ワークショップ手法

漁村振興と言っても、島嶼国、大陸のある一地域、内水面、宗教、文化、地理的条件、村落の社会背景等状況が全く違うことから、実際に今回のワークショップの結果が特定プロジェクトの形成へ直結するものではない。計画当初は事例を用いて議論することも検討したが、今回はあえて前提条件は設定はせず、漁村、村落開発を行う際に「何が問題なのか」、「どういった問題が存在しているか」、「どの様な事を考慮しなくてはいけないか」を出来るだけ広く参加者の経験から議論することに重点をおくこととし、「漁村の生活レベルが向上しない」という課題を中心として、PCM<sup>1</sup>手法で問題分析を行うこととした。

## 4) ワークショップスケジュール

月日：平成13年5月9日(水)

場所：国際協力事業団 13A会議室

13:30 受付開始(登録、名札、ワークショップ資料の配付)

14:00 14:10 開会の挨拶 森林・自然環境協力部長 宮川秀樹

14:10 14:30 ワークショップの目的、経緯の説明 水産課長 川村始

14:30 14:35 自己紹介

---

<sup>1</sup> PCM(Project Cycle Management)：プロジェクトの発掘、形成を含む計画、プロジェクト審査、実施、モニタリング、評価とそのフィードバックまでの一連の事業サイクルを運営管理する方法



14 : 35	14 : 45	ワークショップスケジュール説明、PCM 手法説明
14 : 45	15 : 00	参加者分析
15 : 00	16 : 45	グループ毎に「漁民の生活が向上しない」理由の問題分析
16 : 45	17 : 15	グループ毎の発表
17 : 15	17 : 25	意見交換
17 : 25	17 : 30	閉会の挨拶
17 : 40		懇親会

5) 参加者リスト： 39名(男：34名 女：5名)

氏名	所属
山口 克己	農林水産省総合食料局国際部技術協力課
田原 康一	水産庁国際課海外漁業協力室
馬場 学	水産庁国際課海外漁業協力室
兼川 千春	立教大学大学院
鈴木 修一	杏林大学大学院
東 誠	神戸大学
石田 健一	東京大学海洋研究所
川崎 博之	東京大学大学院
荻上 健太郎	日本財団国際部
宮田 龍朗	(財)林業土木コンサルタツ
村山 哲也	CDCインターナショナル
佐藤 宏幸	Values and Visions
岸岡 一彦	IUCN日本連絡事務所
藤原 俊司	(株)国際水産技術開発
保正 竜哉	(株)日本NUS
嵯峨 篤司	(社)海外水産コンサルタント協会
本間 謙	JOCV OB
志村 茂	国際協力専門員
藤田 由布	青年海外協力隊事務局
橋本 和華子	社会開発協力部一課
田中 宏幸	調達部契約三課
和田 泰一	総務部広報課
三次 啓都	農林水産開発調査部農業開発調査課
大崎 光洋	神奈川国際水産研修センター
た水尾 真也	神奈川国際水産研修センター
宮川 秀樹	森林・自然環境協力部
吉浦 伸二	森林・自然環境協力部 計画課
川村 始	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
榎本 宏	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
千賀 和雄	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
三村 一郎	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
佐藤 吉洋	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
奥村 真紀子	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
小林 花	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
石原 光	森林・自然環境協力部 水産環境協力課
牟木 久雄	国際協力専門員
石本 恵生	(株)オール・シーズ・アグロフィヤリス コンサルタツ
財津 吉寿	国際耕種株式会社
稲田 敏昭	(株)応用生物

## (2) 終了時アンケート結果

### 1 . ワークショップにどのような事を期待していましたか？

- ・環境分野等で排水規制等も含めて広い意味での環境保全もあるのかなと思いました。
- ・大体期待通りのワークショップであった。
- ・水産国際協力分野におけるこれからの方向性や様々な分野の方々の考え方。
- ・こういうのは初めてだったので、「ワークショップ」とはなんぞや？といった興味があった。
- ・水産と村落の関係。
- ・全体像をとらえ関係者を知る。
- ・生活レベルが向上しない原因追及だけでなく、それをどのように解決していけば良いのかといった所までの議論を期待した。
- ・色々な視点から見た意見を伺いたかった。
- ・今後のプロジェクトアイデア収集。
- ・人的交流。
- ・PCM手法を体験すること。
- ・漁村の問題を理解すること。
- ・JICAの取り組みを理解すること。
- ・ワークショップがどのように運営されるのかが実は一番興味がありました。ファシリテーター手法等、なにか勉強になることがあれば、と思っておりました。

### 2 . ワークショップの結果、どのような事が得られたと思いますか？

- ・タイトルの水辺保全というよりも、村落開発ワークショップになってしまったが、ジェンダー等の分析も少し聞けてよかった。いろいろな立場の人の話があり考え方が参考になった。
- ・水産関連分野では今まで考えていたような問題がでた。専門分野が水産以外の参加者から様々な視点から教育・行政関連事項などに問題分析が広がったことが良かった。
- ・漁村開発の全般についてはいろいろな考え方を得られて有益であった。
- ・ワークショップは宝の山。
- ・いろいろな角度からの見方が参考になった。
- ・全体像を捉え関係者を知ることができた。

- ・考え方の多様性。
- ・異なったバックグラウンドの人の意見が聞けて面白かった。
- ・今までにない視点（漁村への効果）と（農村への効果）等、1分野におさまらない見方を再確認させられた。
- ・PCM手法を理解した（実は何度か体験していたことに気づいた）。
- ・漁村の問題、及びこれに対するJICAの取り組みの一端を理解した。
- ・3つの班に分かれたが、それぞれの立場の違いが鮮明にでた。
- ・「リアリティのないところの限界」のようなものを体感できたこと。自分は知らない（だから当事者の声に耳を傾ける）という立場が取りにくかったのは確かだと思います。参加者の発言は経験の有無に関わらず、すべて「予想・仮説」であるわけで（この点は漁村を知っている方であってもやはり免れなかったでしょう）油断しているとステレオタイプの再生産に終止する危険性はあったと思います。例えば「（漁村の人たちの）意識が低い」という『理由』は誰のリアリティなのか、といえは「支援する側」「やりたいプロジェクトがある側」なのだとは私も思いました。終了時にいただいた内部討論の結果の問題関連図にも「漁民が問題を解決できない」というのが漁民の生活レベルが向上しない理由としてあげられていますが、これも同様に「したい援助がある側」のリアリティでしかないかもしれない、と私は思っています。

「漁民の問題理解・問題解決を私たちが理解できない」というケースが往々にして多いのではないのでしょうか？繰り返しますが「リアリティのないところの限界」をはっきり感じられたのが、私のとても貴重な収穫でした。ただこれはこのようなワークショップの設定上仕方がないことです。だから今日のワークショップが意味がない、と思っていると取られるとそれは私の心外です。また「教育レベルが低い」という言葉が何を含むのか？たとえば基礎教育なのか、職業教育・高等教育なのか。「教育レベルが低いと何が問題なのか？」では「教育レベルが上がるとは何か？」「教育レベルが上がることによって得られるものはなにか？」ということを改めて考えるいいきっかけをもらったと感じています。

教育関連の「JICA 専門家」経験者でありながら、私には明確な答えがないようなのです。（というか、いろんな答えは持っているのだけれど自分の中では常に解答が揺れ動いている、というのが正確な表現でしょうか）BHNとしての基礎教育の必要性も仮説のひとつで商売柄そのところは疑問符を吹っ飛ばして肯定することにする、っていうことが多いのです。でもああやって「なぜ生活レベルが低いのか」

という問いの前で「教育レベルが低いから」というのは、なにか簡単すぎる、という印象を持ちました。こういう簡単さが、国の名前を隠して調査書を読むとどれもよく似ているような気がする、っていうことにつながっているのでしょうかね。あと、なんだかんだいしつつ、3グループ間で違いがけっこう出た、ことはとってもいい収穫だったのではないのでしょうか？

さて、当事者がいない(対象漁民がいない)のは設定上仕方がないことです。としたら、どうやってあれだけの「宝の山(出席者)」を使いこなすのか？時間的制約もありますものねえ。ある程度継続することでなにか違う展開が起こる、という気もします。その第一歩が今回のワークショップと考えれば、私にはとても好感の持てる(なんて偉そうですが)企画でした。教育開発プロジェクト系でもこういう企画をやって欲しいなあ、と思ったりしております。JICA だったら誰に提案すればいいのでしょうかね。何か良いアイデアがあったら教えてください。

### 3. ワークショップのセッティングについて

- ・ JICA 内部、特に林水調、無償業務4課等、水産関連部署からも広く参加してもらうべきでは。
- ・ 参加人数は20人程度が適当であろう。(1グループ5-8人程度)
- ・ 時間が短く、問題分析が不十分であった。一つ一つのカードの因果関係を検討する時間が欲しかった。
- ・ 中心課題に「漁民の生活が向上しない」を選択したことに問題ないだろうか？中心課題が具体的で無かったために、中心課題の直接原因となるカードを出すことが難しく感じた。
- ・ 他分野の方々が混じったグループとの直の討議の場が欲しかった。
- ・ 具体的な地域を設定してやると良いのではないか。
- ・ バックグラウンド別に分けてのPCMだったがシャッフルされても良かったのではないか。
- ・ 前もって分析のステップを説明されたら如何でしょうか。
- ・ 時間が短い。
- ・ 会場が狭い。
- ・ 参加者のバックグラウンドを考慮して班分けされていたので、意見を出しやすかった。
- ・ 時間の制約から、最後に班でシェアする時間がなかったのが残念。

- ・このような形でもう少し具体化したPCMワークショップをするのが良いのではないか。(段階的に)
- ・原因追及にとどまって、ではどうすれば良いのかという部分が無かった。

#### 4 . ワークショップ結果、どの様な事を要望/期待しますか？

- ・ JICA 内部の横の繋がりを深め、ジェンダーもしくは環境分野を深く取り込んで、漁村振興が行われるようになることを期待します。
- ・ 個人的には、零細漁村を取り巻く社会環境（保健医療・教育・生活文化習慣など）に焦点をあてた漁村振興、つまり、村落開発あるいは地域総合開発のようなものに関心があり、その知識を深めてゆきたい。
- ・ まだまだ「技術」中心、「経済」中心のように感じたので、「社会」、「文化」的側面がもっと考慮されるようになればよいと思った。
- ・ このようなワークショップは JICA だからこそ可能。この試みは評価できる。JICA の他部署でも活用してみたいと思わせるような報告書を期待する。
- ・ 「今回のアウトプットは（零細漁村に対する）偏見の再生産かもしれない」という前提で考える必要はあると思います。（私にとっては）その偏見の象徴とも思える「漁民は自分たちで解決できない」、「漁民は意識が低い」という考え方をめぐってプロセス重視の参加型に取り組まれている人や「漁民は意識が低かった」という経験を持っている人が集まってわいわいがやがややるのも面白い、なんて思ったりします。きっと（漁民ではなく）私たちの方こそ訓練が必要でしょうから。

#### 5 . その他ご意見/ご感想があればご自由にお書き下さい

- ・ 企画が良かった。
- ・ 水産課全体が PCM 手法を習得していた。
- ・ 水産課全体が十分な時間をかけて準備したもので、意気込みを感じた。内容が濃いワークショップであった。
- ・ 配布された資料「問題系図」は見にくい。字が小さすぎ、横に長く理解しにくい。資料を受け取った人に読む気を起こさせる工夫が必要である。また、読んでわかりやすい内容にする工夫が必要である。
- ・ これからも頻繁に開催し情報交換の場の創設を行って頂きたい。
- ・ 実際に漁業関係者を含めて考えていくべきである。
- ・ 短時間過ぎた気がします。

- ・参加者分析が重要だと思います。
- ・女性が入ったプロジェクトであまり経験がありませんでしたが女性の重要性を再確認させられた思いです。
- ・女性の比率があまりに少ないので驚いた。
- ・企画・実施ご苦労様でした。そして面白い機会をありがとうございました。ついでもうひとつ。PCMの行き着くところは目的を設定し、PDMで道筋を示し期待される成果を着実に達成する、という理解でいいのでしょうか？だとすると、プロセス重視の参加型とは根本のところ哲学が違ってきますよね。予定通り進まないのが当たり前という前提に立つのがプロセス重視でしょうから。参加型、という言葉がある意味で正反対の哲学のもと使われているような気もしています。
- ・人口が多くなっているのは都市部、大規模な漁港・商業港に近接した地域ではないかと思うのです。「低賃金労働者」としての人口流入で都市化によるものではないでしょうか。「排他的」とか仮定した遠隔地の漁村には人口は流入してこないように思うのですが。というのも、私のいくつかの「漁村」の人口で印象があるのが、
  - 1) 人口が増加しているように思えない
  - 2) 労働人口が偏っている(壮年、老人、婦人、少年が働いていて青年層が少ないように感じてます。青年層は村から外で働いている方が多い)
  - 3) 漁村の生産性は多くの人口を養えるほど高くないのでは？
  - 4) むしろ漁村は次世代の漁師不足になっているのでは？(日本もそうですけど・・・)
  - 5) 漁民の生活が向上する(例えば若年層の教育向上や家計収入の増加)と、漁村自体は衰退する(人口組成の空洞化?)可能性もあるのでは？
  - 6) 漁民の生活向上と漁村の衰退・過疎化という相反する問題を抱えないか？

## 2. ワークショップ分析結果

### (1) 参加者分析結果

#### 《手順》

本来であれば参加者全員で参加者分析を行うべきであったが、時間に制限があったことから、水産課員で事前に課内ワークショップを実施した際の参加者分析結果を発表し、それに基づいて参加者に更に追加した方が良いカード、問題があるカードについて議論した。分析結果は別添資料3のとおりである。

### (2) 問題分析結果

#### 《手順》

事前に参加者に送付したアンケートを基に、参加者の専門分野・経験に基づいて以下のとおり「水産」「環境」「村落」の3グループに分かれ、「漁民の生活レベルが向上しない」理由を中心問題として分析作業を行った。

表2：グループ分け

水産グループ	環境グループ	村落グループ
三村 一郎(モデレータ)	奥村 真紀子(モデレータ)	小林 花(モデレータ)
石原 光(副モデレータ)	榎本 宏(副モデレータ)	佐藤 吉洋(副モデレータ)
馬場 学	山口 克己	田原 康一
東 誠	川崎 博之	兼川 千春
藤原 俊司	宮田 龍朗	鈴木 修一
保正 竜哉	岸岡 一彦	荻上 健太郎
嵯峨 篤司	守弘 栄一	田中 清文
本間 謙	和田 泰一	村山 哲也
志村 茂	大崎 光洋	佐藤 宏幸



田中 宏幸	吉浦 伸二	松山 博文
た水尾 真也	千賀 和雄	藤田 由布
宮川 秀樹	稲田 敏昭	橋本 和華子
川村 始		三次 啓都
石本 恵生		財津 吉寿
牛木 久雄		石田 健一

各グループの分析作業は以下の様に進められた：

#### 1) 水産グループ

##### 《手順》

最初に中心問題である、「漁民の生活レベルが向上しない」の直接原因について、参加者全員が各自の意見をカードに記入した。次にその中から4つの直接原因が導き出された（「漁業以外の現金収入が少ない」、「漁業収益が少ない」、「向上（労働）意欲に乏しい」、「向上意欲が発揮できない」）。

次に、4つの直接原因を、3つのグループ「漁業以外の現金収入が少ない」、「漁業収益が少ない」、「労働意欲」グループに分け、それぞれの直接原因にあたる問題分析を行った。

各直接原因ごとの問題分析終了後、各班ごとに問題系図の導き方の説明をグループ全員に対し行い、最終的なグループの意見の一致を経て「水産」グループの問題系図の作成を行った。

##### 《分析経過》

- ・「漁業以外の現金収入が少ない」グループ：特に域外販売を中心に分析を行った。
- ・「漁業収益が少ない」グループ：「資源が少ない」から「環境悪化」・「乱獲」にレベルダウンし、それぞれ下に枝葉を伸長していった。
- ・「労働意欲」グループ：社会観念・社会構造（人的・物的）にまたがった議論が開かれた。
- ・分析結果は別添資料4参照。

### 《総評》

「水産」グループのため、水産技術に特化した議論が展開されると予想されたが、漁民の労働に対する取り組み姿勢に関する部分に議論が集中した。

## 2) 環境グループ

### 《手順》

全員にカードを書いてもらった後、全員である程度整理した。その後、「所得」、「行政」、「環境」の3グループに分かれてそれぞれ分析した。

### 《分析経過》

- ・所得が少ないことが「漁民の生活レベルが向上しない」原因としてしまうのは早計ではないか、市場経済の浸透と生活レベルの向上との関係を考慮しなければならないのではないか。最終的には、所得と生活レベルは密接な関係があるという前提で議論を進めた。
- ・所得がなくても、自給自足の生活をしている漁民もいるはずである。「自家消費分の漁獲が少ない」というカードに反映された。
- ・「漁業資源が乏しい」といっても、漁業資源についての情報が得られていないことが多く、乏しいかどうかわからないという問題が提起された。
- ・「漁獲量が増加しない」原因として、「気象条件に左右される」、「自然環境の影響を受けやすい」、「自然災害」、「漁業不適地」のカードも出たため、重要であるという認識は参加者に共通していたが、分析まで至らなかった。「出漁できる日が減る」ことがこれらの結果として起こり、これが「漁獲量が増加しない」ことによりつながる原因となっているという共通認識は得られたが、原因 - 結果の関係を分析するには至らなかった（時間切れのため）。
- ・分析結果は別添資料5 参照。

### 《総評》

- ・「環境」グループということで、沿岸域環境が悪化しているという部分、一つについての詳細な分析されたのはよかった。
- ・環境を「物理的」、「化学的」、「生物的」の三要素に分けたことで、カードが整理された。

- ・ 漁業のための環境が悪化することの分析はされたが、生活のための環境については、全く触れられなかった。

### 3) 村落グループ

#### 《手順》

中心問題「漁民の生活レベルが向上しない」の直接原因を各自カードに記入し、「一般に教育レベルが低い」、「獲った魚が売れない」、「漁獲高が低い」、「収入が少ない」、「社会保障がないことが多い」、「社会的孤立」の6つのカードが挙がった。2人ずつの6小グループに分かれ分析作業を行い、その後、グループ内で分析結果を発表し、議論を通して、カードの追加、整理を行った。

#### 《分析経過》

- ・ 「漁民の生活レベルが向上しない」の定義が曖昧であることから、村落グループとしての統一した認識を持つために、状況を表すカードを各自記入し、横に配置した。具体的なカードとしては：「衛生的な水がない、遠い」、「幼児死亡率が高い」、「満足な食事がとれない」、「平均寿命が短い」、「栄養が十分でない」、「就学率が低い」、「子供の仕事量が多い」、「労働時間が長い」、「お金がない」、「資源にアクセスできない」、「社会的に差別されている」、「余剰金による生産業への投資ができない」。
- ・ 「一般的に教育レベルが低い」は中心問題の直接原因にはならないのではないかとの議論があったが、中心問題の状況を表すカードに「就学率が低い」を列挙することで、直接原因になりうると合意された。
- ・ 「漁民の生活レベルが向上しない」のは、もともと生活レベルが低いのか、努力しているが生活レベルが向上しないのかによって分析内容が変わってくるとの意見があった。グループで議論の結果、今回の分析作業はより大きな視点で捉えたいとの意図より双方を念頭に分析を行うこととした。
- ・ 教育面で「動機付けが低い」と言っても、初等教育、高等教育に対する関心もあれば、職業訓練、啓蒙活動といったものもある。実際に現場では双方を調査し、現状を把握する必要がある。
- ・ 女性の労働については、国によっては男性と同じように漁労に携わっている国もあれば、水産加工のみに従事している国もある。女性が対象国でどの様に関わりを持っているかも調査する必要がある。

- ・水産業の場合、生産性重視の開発計画に重点を置かれることもあり、なかなか漁民の社会的背景まで考慮できない状況になるのではないか。 それによって孤立を生み出している？
- ・漁民は船の上では規律を守り主従関係のもとで働いており、船の上では連帯感がある傾向がある。その反面、収入が不安定で、漁獲はばくち的な面もあるため、コミュニティでは孤立することがある等の二面性がある。
- ・分析結果は別添資料6参照。

#### 《総評》

- ・本グループは社会学、教育、ジェンダー、農村開発、開発コミュニケーション等様々なバックグラウンドの方々が参加し分析を行ったことから、他のグループとは違った分析（例：社会保障、社会的孤立）が行われたと思う。
- ・特定の漁村をターゲットにした訳ではなかったため、分析が難しかった面もあった。

最後に、本ワークショップを開催するのに当たり、水産課員で行った問題分析を参考までに配布した。（別添資料7）

### （3）議論内容

ワークショップの最中に参加者によって議論された事項は以下のとおりである。

- ・中心問題である「漁民の生活レベルが向上しない」に関し、まず「生活レベル」の定義を参加者が明確に共通認識を持つことが重要である。
- ・問題分析を進めるにあたって、行政処置が可能な問題、そうでない問題の整理を行う必要があるのではないだろうか。
- ・肉と魚の価格比較において、「肉より魚の方が高い」ということが問題として挙げられるが、肉より高価で何が問題なのか理解できない。価格は需要-供給の関係で決定されるのであり、価格が高いというのはそれ程収益性が高いということであり、問題として取り上げることに對し理解できない。別の真の問題が隠れているのではないか。
- ・教育レベルの低さ等教育問題が、各グループから問題の提起がなされているが、「教育」は「(学校)教育」と「訓練」と分けて考えるべきである。

- ・ジェンダーについては、今回あまり問題系図にでてこなかった。ジェンダーについては地域的特異性が強く、総論ではなかなか議論することが困難であるということに起因する。
- ・途上国の漁民の現状を知らない参加者にとっては、なかなか漁民のイメージをもつことができず、積極的に参加しづらい場面があった。
- ・一方、様々な分野の方が集まって、視野を広めることができ、今回の参加者構成は非常に良かったとの意見もあった。
- ・上述事項に関連し、水産プロジェクトを実施する際に、水産という単一の分野の視点からでなく、森林、農業等との視点から複合的にプロジェクトをとらえることが重要である。例えば、魚の薫製のためには、薪としての木材が必要になり、木材確保が森林伐採につながることもあるし、内陸部での海水使用によるウシエビ養殖が塩害により周辺の農場にダメージを与えることもある。
- ・今回のワークショップも非常に有益であったが、実際に漁村で同じようなワークショップを開催してみたら非常に面白いのではないだろうか。
- ・一般的に漁村と比較して農村の方の教育レベルが高く、理解度が高いためプロジェクトを円滑に実施することができるといえるのではないだろうか。
- ・「労働意欲が低い」というのは、全てのケースにおいて、問題に成り得るのだろうか？例えば、漁民の収入が低いと第三者が判断したとしても、実の本人は今の収入に満足しているかもしれず、あくせく働いてない、つまり、ゆとりをもって働いているのかもしれないし、第三者が勝手に怠け者とレッテルを貼っているだけということもありうる。

### 3 . 今後の課題

「水辺保全と村落開発」を中心に据えたプロジェクト形成において、今回のワークショップの結果、以下の点が明らかにされた。

1 ) ニーズの相違：漁村社会は多種多様であり、例えば漁民以外の地域住民がいること、男性と女性の開発ニーズが異なること、移動漁民や水上生活をする漁民のニーズがあること等、広い視野からのニーズに把握が必要である。

2 ) 総合的な漁村開発への取り組み：途上国の漁村住民が抱える問題は一般に複数の要因が複雑に絡み合っており、漁村開発には総合的な取り組みが必要とされる。

3 ) 水産開発を越えた発想：漁村振興プロジェクトは漁民の生計や福祉の向上が目的であり、水産開発はその手段のひとつに過ぎない。漁民の所得を増やすためには、水産養殖ではなく、養鶏・養豚がふさわしいことさえありえる。水産だけの枠にとらわれるのではなく、広い視点からの取り組みが求められている。

4 ) 公正の重視：援助を要する漁村・漁民は多く存在するが、実際に援助を与えられる漁村や漁民の数は限られている。開発対象漁村やターゲットグループの選定には、経済効果や技術的難易度の視点ばかりでなく、社会的な公正を重視し、できるだけ客観的な基準が用いられる必要がある。

5 ) ベースライン調査の重要性：漁村を捉える上で、単に水産技術に係る調査だけでなく、対象漁民がどのような状況におかれているかを社会的側面からも調査し、全体像を把握する必要がある。

6 ) PCMの現地での活用：JICAのプロジェクトにおいて、PCM手法が浸透しつつあるが、漁村でワークショップを行っている例は少ない。可能なかぎりプロジェクトでは現地でも実施し、その結果を情報発信することで、プロジェクトの質を高めることに繋がると思われる。

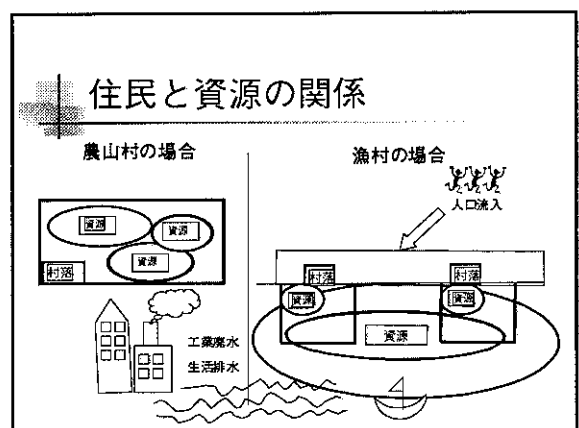
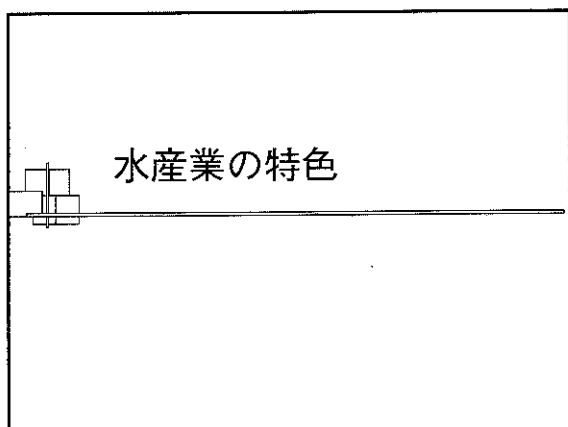
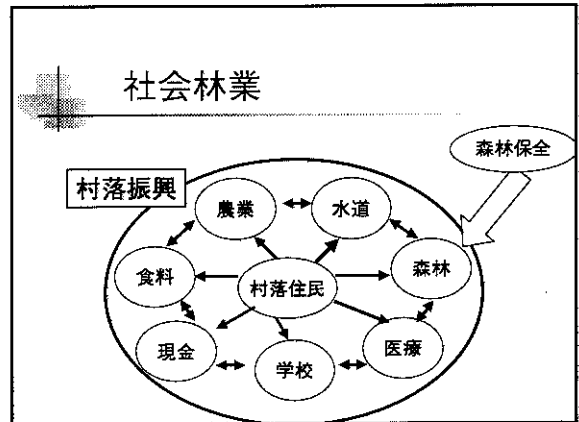
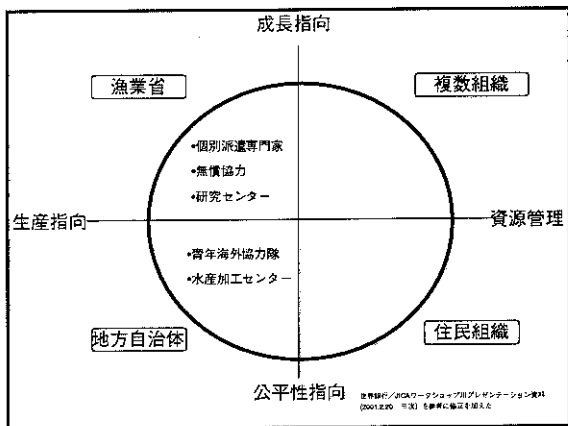
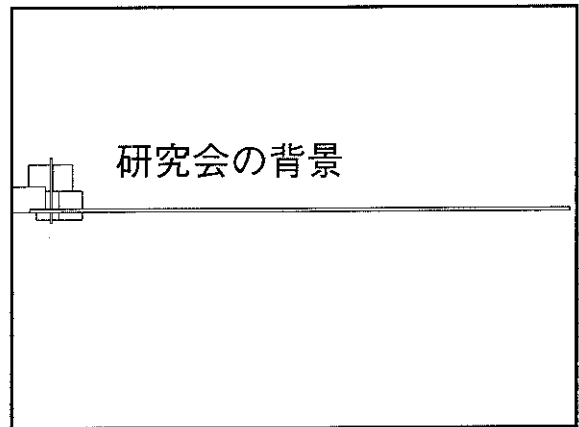
7) ワークショップ、勉強会の開催：本ワークショップははじめての試みであったことから、大きなテーマで議論を行った。しかし、今後はもう少しテーマを絞りワークショップ、勉強会を開催し、今回構築したネットワークを維持し更に強化する必要がある。

以上

## <資料編>



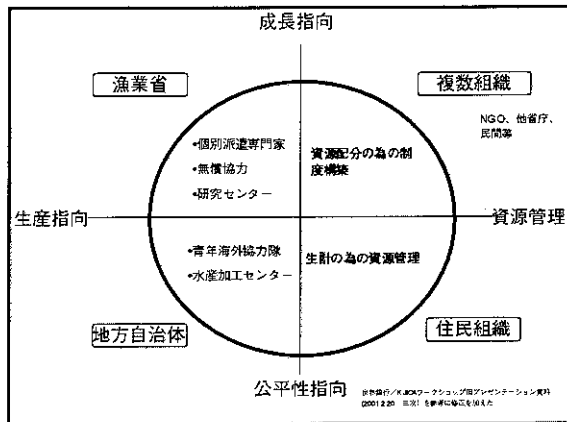
別添資料1：ワークショップ説明文書



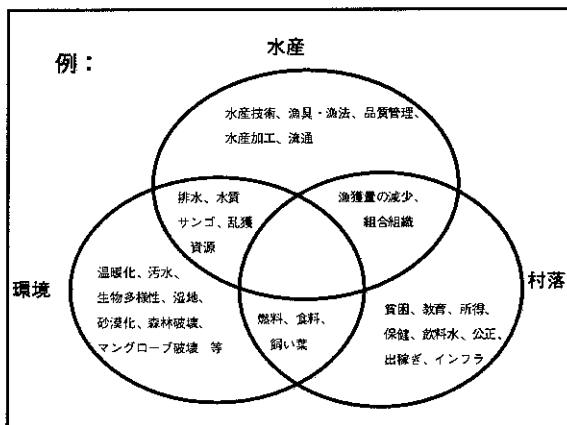
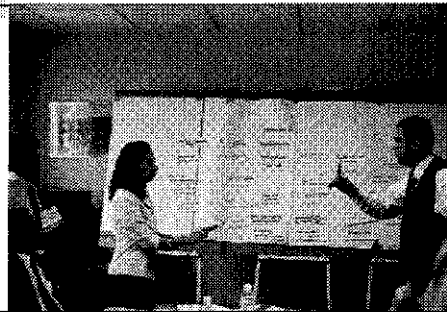
## 農林業と漁業の資源の特徴

	農林業	漁業
所有	多くの場合、誰のものか明らか	誰のものでもない
範囲(境界)	明らか	あいまい(多くは不明)
資源の状態	目に見える	見えない
生活の場との距離	多くの場合、近い	多くは遠い
工業の影響	比較的少ない	直接的影響を受ける

## ワークショップの目的



## PCM手法の導入

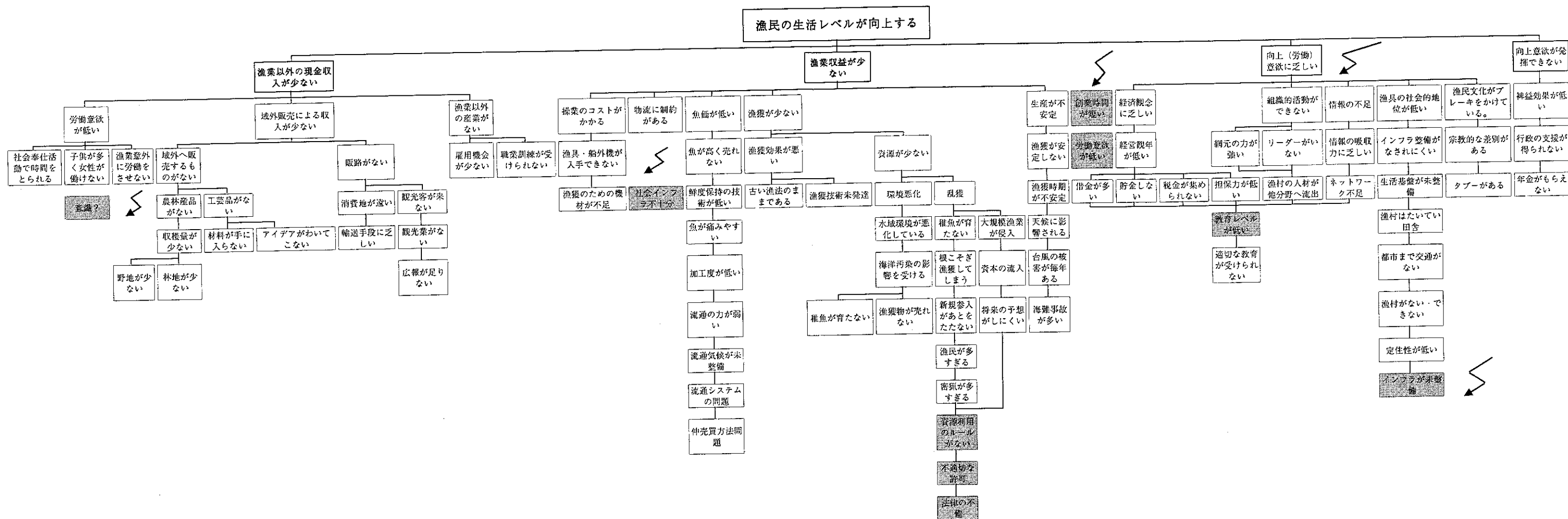


参加者分析結果

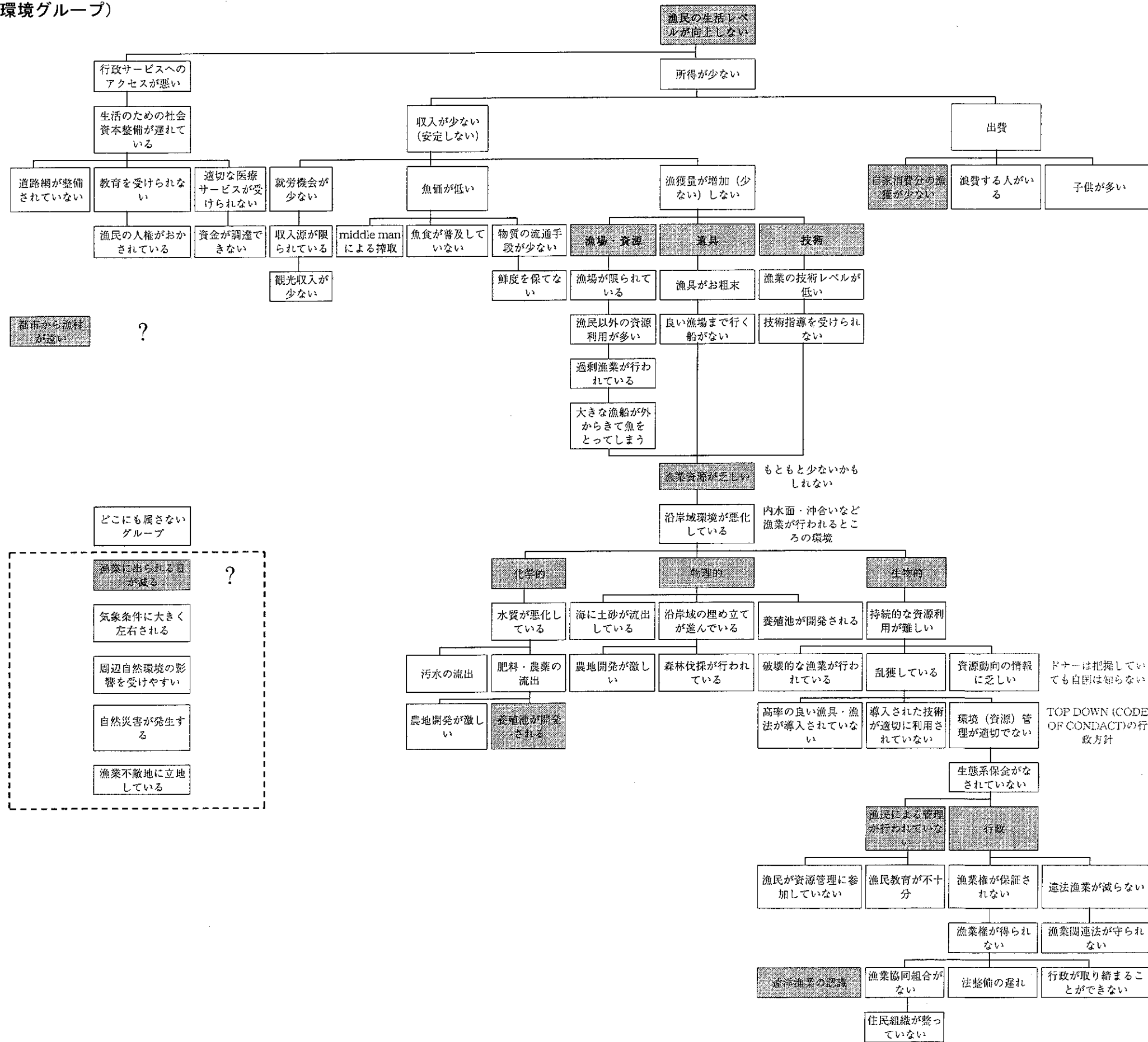
受益者	影響を受ける人(負)	潜在的反対者	協力者	実施者	決定者	財政負担者
零細漁民(男女)	零細漁民(男女)	仲買人	NGO	被援助国政府	漁業省	被援助国政府
子供	網元	網元	地域代表者	地方行政	環境省	JICA(ドナー)
普及員	水産会社	地域代表者	地域組織(組合)	JICA(ドナー)	地方行政	漁民
地域住民	観光客	水産会社	研究所(水産・環境)	NGO	JICA(ドナー)	観光客
地域組織(組合)	消費者	政治家・地域有権者	学校(先生)	零細漁民	地域住民	NGO
不法漁業者	不法漁業者	零細漁民	保健所(保健婦)		政治家・地域有権者	地方行政単位
消費者	漁業関係者(加工)	先達団の教師	関連行政機関		計画省	
観光客	農民	NGO	地域民間会社		観光客	
仲買人	インフラ事業者(電力)	地域外の付与	宗族関係者			
牛き物	森林利用者	農民				
魚(養)						

WSにて追加されたカード

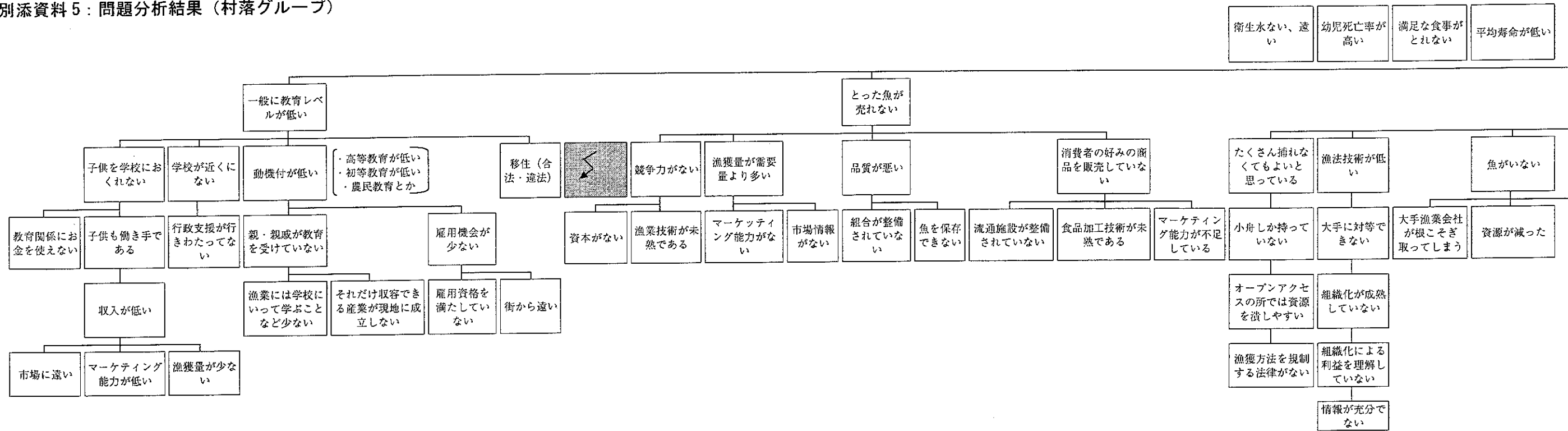
別添資料3：問題分析結果（水産グループ）

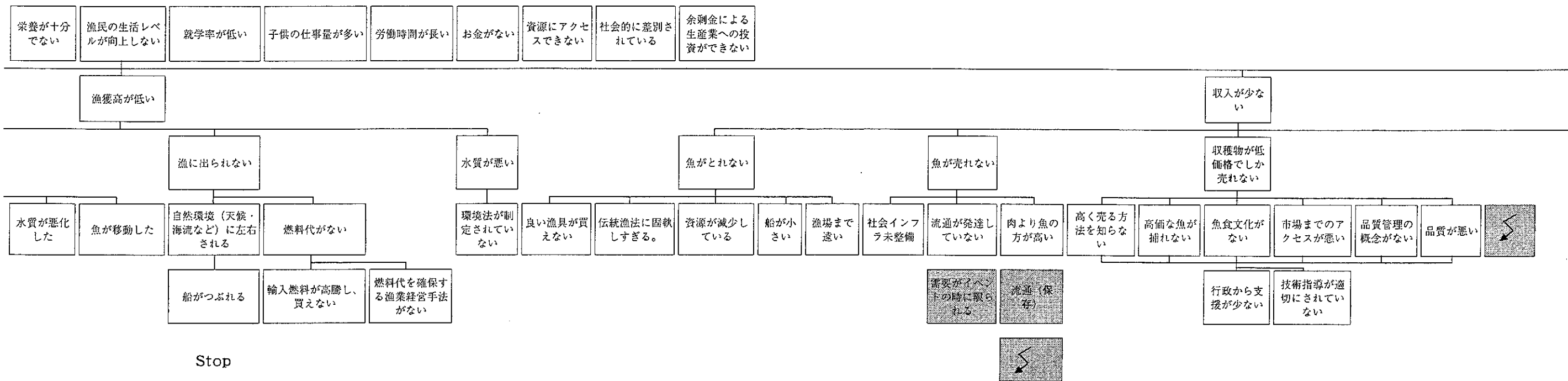


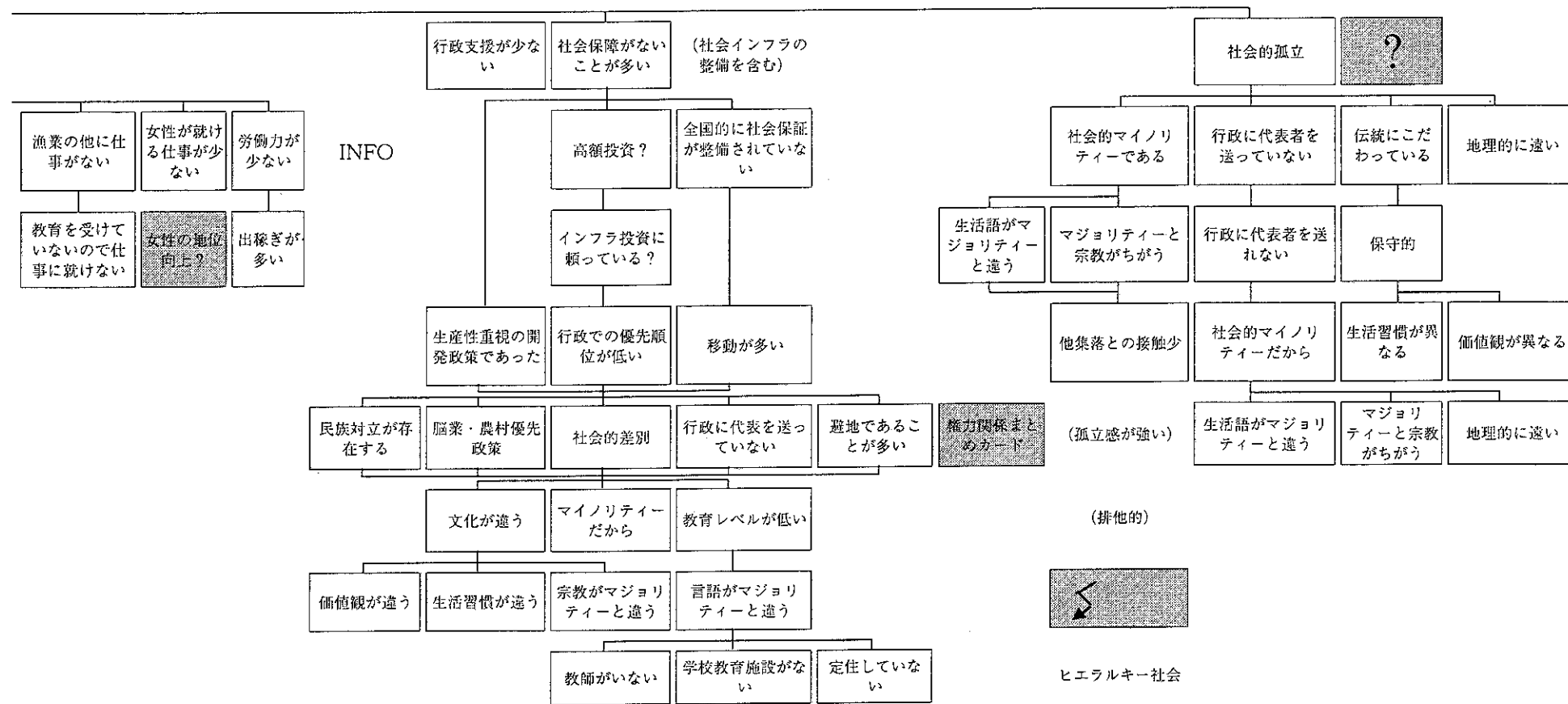
別添資料 4 : 問題分析結果 (環境グループ)



別添資料 5 : 問題分析結果 (村落グループ)

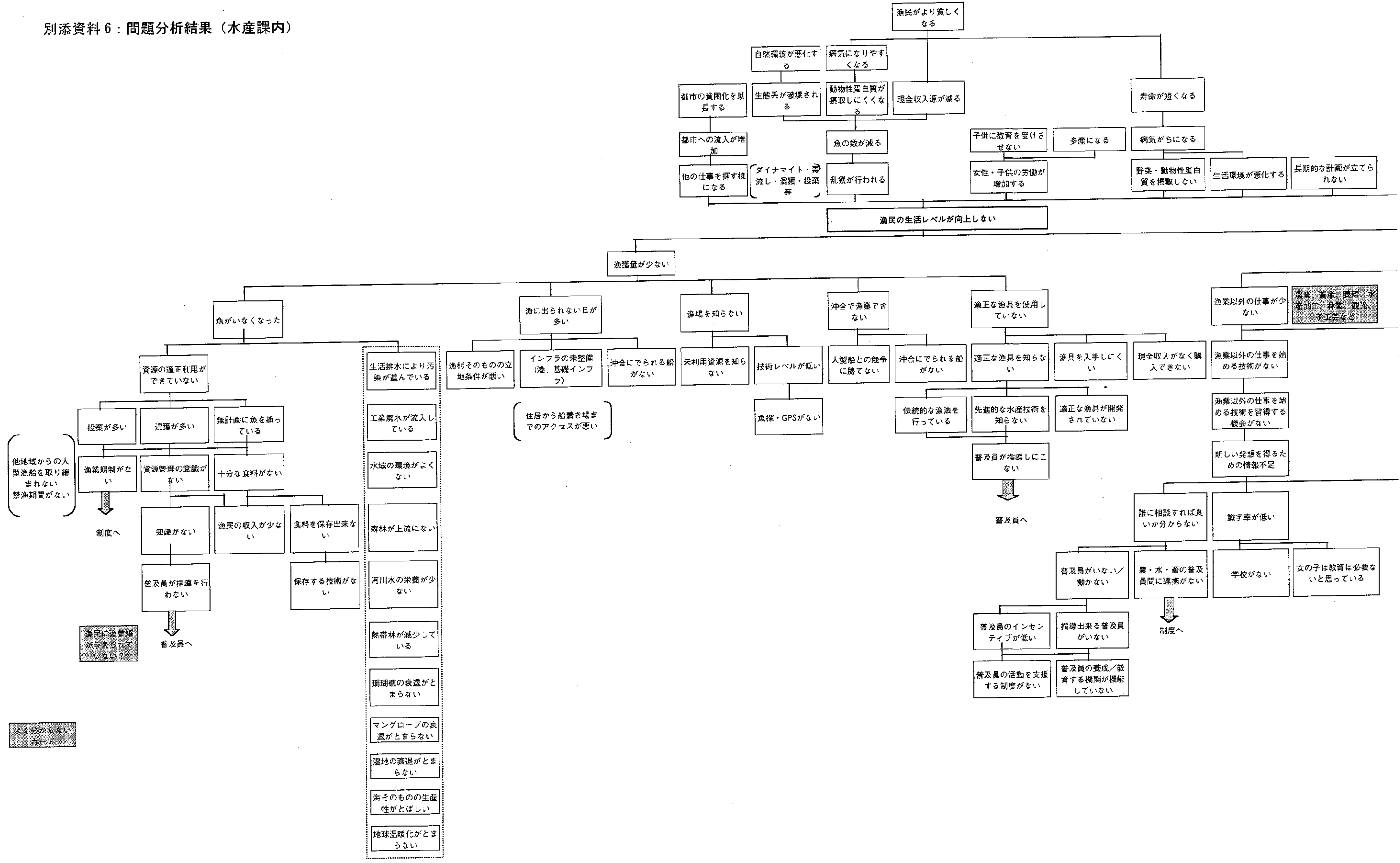








別添資料 6 : 問題分析結果 (水産課内)



政府への不信感が募る

